



アイアン・ジャイアント

かつて、スーパーマンにあこがれた
殺人ロボットがいました――

舞台は 1950 年代、冷戦真っただ中のアメリカの田舎町。どこにでもいるようなわんぱく少年の
ホーガースは宇宙から突如飛来した巨大ロボットと遭遇する。この巨大ロボット「ジャイアント」は、
自分がどこから来たのか、何のために造られたのか、一切の記憶を失っていた。子どものように無
邪気な心をもつジャイアントとホーガース少年の間にはすぐに友情が芽生え、一緒に遊ぶ中で少年
はロボットに命の大切さを説き、ロボットは少年がもっていたコミックのヒーロー「スーパーマン」
に憧れるようになっていった。

ある日、いつものように遊んでいたホーガース少年がジャイアントにおもちゃの銃を向けた瞬間、
ジャイアントは自分の中の隠された回路に電流が走るのを感じる。彼は、戦争用に造られた、大量
殺戮兵器だったのだ……

今回紹介するのは 1999 年制作のアニメーション映画『アイアン・ジャイアント』。少年と巨大
ロボットの交流が、昔ながらの柔らかいタッチで描かれた作品だ。その交流の中で、少年はロボッ
トにさまざまなことを教える。それは、命あるものはいつか死ぬということ、そして何より

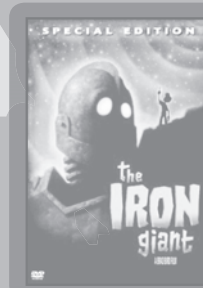
「君は兵器なんかじゃない。なりたい自分になれ！」

というメッセージ。「ボク、シヌ?」「いつかね……」そんなふたりのやりとりが切ない。

この物語をさらに魅力的にしているのは、1950 年代という時代背景だ。東西冷戦が幕を開けた
時代。自国の兵器には目をつむり、敵国の危険性ばかりがクローズアップされていた時代。核ミサ
イルは防空壕に避難すれば大丈夫と小学校で教えられていた時代。その時代の中でジャイアントを
異常なほどまでに危険視する政府。これらの描写が、一見ファンタジックな世界観に似つかわしく
ないシビアな表現を支えている。

物語終盤、ロボットの存在を嗅ぎつけたアメリカ政府が軍隊を送り込んでくる。少年を守って逃
げるジャイアント。血迷った指揮官によって田舎町に向けて発射される核ミサイル――。そのとき、
ジャイアントの脳裏に少年の言葉がよみがえる。「なりたい自分になれ！」そして、「ボク、スーパ
ーマン……」。そう口にして立ち上がるジャイアントの姿には涙を禁じ得ない。

この『アイアン・ジャイアント』という作品は老若男女を問わず感動させてくれる名作だ。ぜひ、
一度観てみてほしい。そこには、僕たち私たちが忘れてしまった無邪気な心と、切なくも温かな感
動が詰まっている。



アイアン・ジャイアント
スペシャル・エディション

1999年 アメリカ

発売元：ワーナー・ホーム・ビデオ

発売日：2015/07/17

価格：1,800円＋税

はみだし
すてーじ

頭が高い！ 余は5回生であるぞ。
⇒よろしいならば戦争だ

(経・5 頼子P)
(単位の数で殴り合い；編)